

望ましい人間関係づくりのための援助に関する研究 —小学校における予防的・開発的カウンセリングを通して—

竹 田 昇

予防的・開発的カウンセリングとして、望ましい人間関係づくりに有効といわれている構成的グループエンカウンター（以下SGEと省略）を小学校6年生を対象に実践し、その効果を「楽しい学校生活を送るためのアンケート」（以下Q-Uと省略）で測定した。個々の児童の意識や学級集団の状態の変容からSGEの有効性について検証した結果、ある条件の下では、望ましい人間関係を築き、よりよい学級集団を形成する効果が認められた。

<キーワード> 構成的グループエンカウンター、Q-U、予防的・開発的カウンセリング

I 主題設定の理由

1 不登校の現状

福井県教育庁義務教育課（2008）は、平成19年度の不登校の児童数について以下のような調査結果を発表している。

(1) 全国の状況

30日以上欠席者のうち、「不登校」を理由とする児童数は約2万4千人であり、前年比で約100人増加した。出現率においても、0.33%から0.34%（約298人に1人が不登校児童）に増加した。

(2) 福井県の状況

同じく、「不登校」を理由とする児童数は183人で、前年比で23人増加した。出現率においても、0.32%から0.38%（約263人に1人が不登校児童）に増加した（図1）。

(3) 不登校となったきっかけと考えられる状況

「友人関係をめぐる問題」の比率が学校生活に起因するものの中の39%を占めるという結果が出ている。また、「いじめ」は24%である。「友人関係をめぐる問題」が「いじめ」に発展することも多いことを考えると、不登校状態となったきっかけとして、「友人関係をめぐる問題」が要因となっている割合は大きい（図2）。

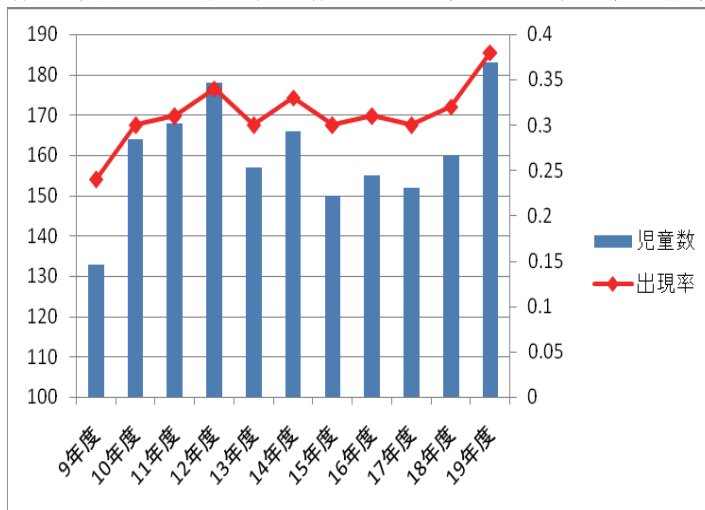


図1 不登校児童数と出現率の推移（福井県の状況）

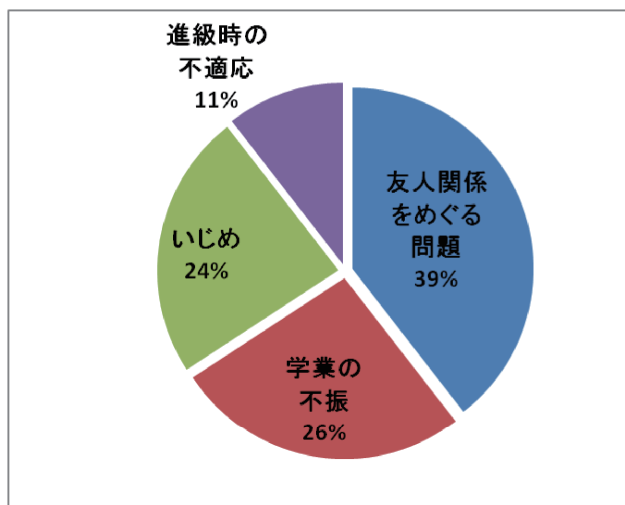


図2 不登校となったきっかけのうち、学校生活に起因するもの（福井県小学校）（複数回答）

2 人と触れ合う体験不足

上記のように、「友人関係をめぐる問題」や「いじめ」など、望ましい人間関係を築けないことを起因とした様々な問題が発生する理由として、人と触れ合う体験が不足していることが考えられる。児童が望ましい人間関係を築き、安心して生活していくために学校の役割は重要であり、児童が対人関係能力を身に付ける場や機会を積極的に設ける必要があると思われる。このような状況の中で、児童と毎日生活を共にする教師が日常的に行える予防的・開発的カウンセリングを進めることは、今後ますます必要となってくるだろう。

予防的・開発的カウンセリングとは、社会的スキル訓練やグループワーク等を通して、児童の適応力や能力を伸長させることを目的とするものである。治療的カウンセリングが対処療法的で受動的なのに対し、予防的・開発的カウンセリングは意図的によりよい人間関係をつくろうとする能動的なカウンセリングである。近年、予防的・開発的カウンセリングの必要性がいわれており、学校において多くの実践がなされている。

3 主題「望ましい人間関係」のとらえ方

自分を価値あるもの（自尊感情）として思えるように、誰からも身体的・心理的な攻撃を受けないといったルールの下、互いに尊重し良さを認め合いながらかわり合える人間関係のことととらえる。

以上のようなことを踏まえて、予防的・開発的カウンセリングの一つであるSGEの技法が望ましい人間関係づくりに効果的であるかどうかを検証するために、本主題を設定した。

II 研究の目的

小学校6年生を対象にSGEを行い、児童個人および学級集団の変容を追跡して、学校生活での満足感や意欲、学級集団の状態との関係を調べ、その効果について検証する。

III 研究の方法

SGEとQ-Uの概念について予備調査を行い（平成19年度に研究協力校にて実施）、SGEの実施方法や活用方法について検討し研究協力校にて実践した。SGE実施前後にQ-Uを行い、個々の児童の意識や学級集団の状態の変容からSGEの有効性について考察した。

1 調査対象者

(1) 予備調査(平成19年度)

福井市小学校3年生(男子16名 女子17名 計33名)

福井市小学校5年生(男子17名 女子19名 計36名)

小学校3年生と5年生を対象に本調査のための予備調査を行った。

高学年になると、児童会活動やクラブ活動、学校行事などにおいて中心的な役割を担うようになり、特に、6年生では最高学年としてリーダーシップを発揮しようとするなどの意識や態度も育ち、役割や責任を自覚して活動するようになる。しかし、思春期特有の不安定な感情がより大きくなり、人間関係に悩んだり、中学校生活への不安を抱きながら生活したりする児童も少なくない。不登校児童数が急激に増加するのこの時期である（図3）。特に、6年生のこの時期に自

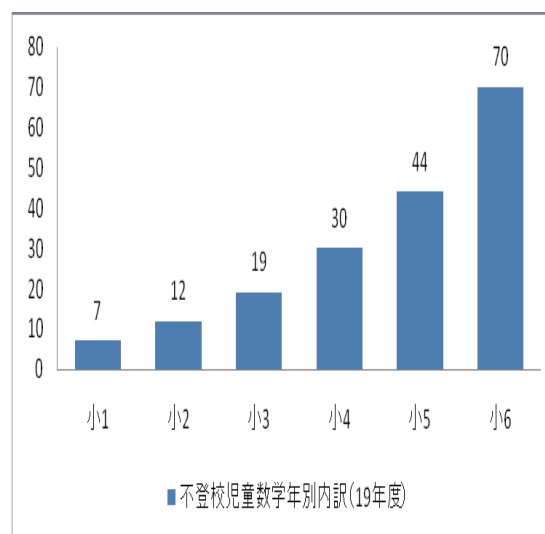


図3 学年別不登校児童生徒数
(平成19年度) <福井県>

分への自信が大きく低下する児童が多い傾向にあることが指摘されていることを踏まえ、互いの良さや違いを認め合うよりよい人間関係を築きながら、自尊感情を高め自分への自信をもてるようにすることが大切である。また、いわゆる中1ギャップにかかわる課題に配慮しながら、楽しく豊かな学級や学校の生活が送れるように支援していくことが必要であることから、本調査の対象を小学校6年生とした。

(2) 本調査(平成20年度)

- 福井市小学校6年生a学級(男子14名 女子14名 計28名)
- 福井市小学校6年生b学級(男子9名 女子9名 計18名)
- 福井市小学校6年生c学級(男子14名 女子13名 計27名)
- 福井市小学校6年生d学級(男子14名 女子14名 計28名)
- 福井市小学校6年生e学級(男子12名 女子14名 計26名)

2 効果測定について

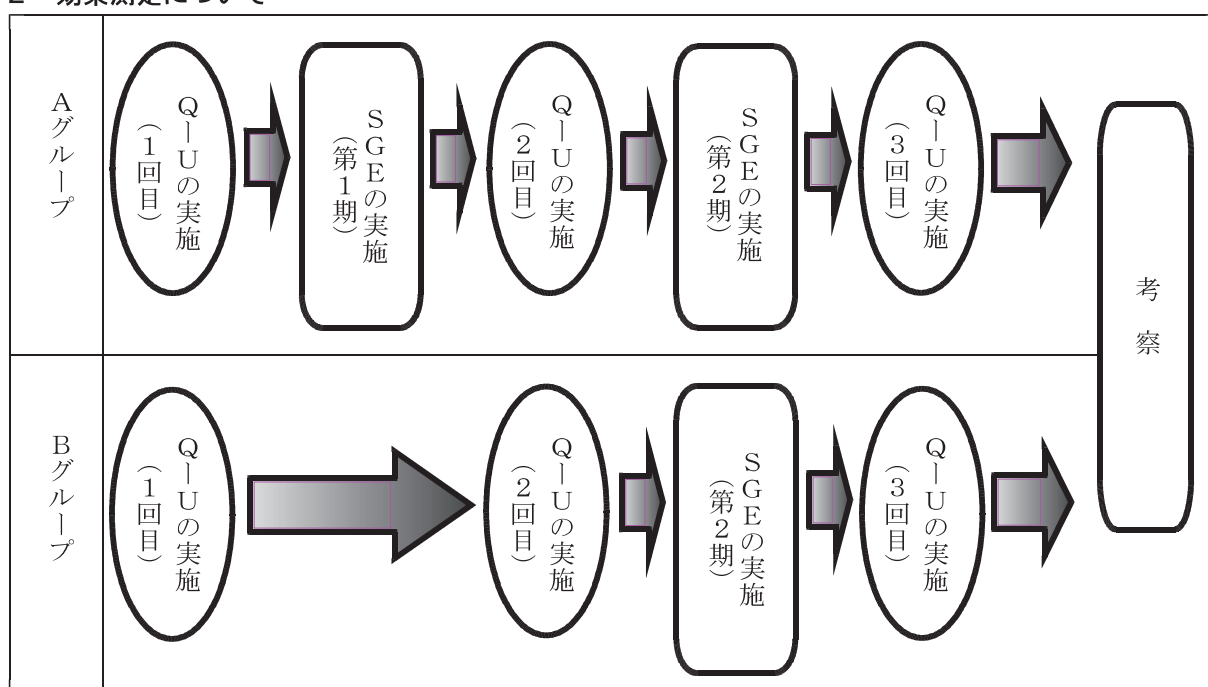


図4 実施の流れ

(1) SGEの効果測定

下記のようにQ-Uを実施し、個や集団がどのように変容したのかを比較しSGEの効果を検証した。

- 1回目 AグループがSGEの実施を開始する第1期の前(6月10日)
- 2回目 BグループがSGEの実施を開始する第2期の前(6月27日)
- 3回目 両グループがSGEの実施を終了した第2期の後(7月16日)

(2) SGEの実施条件

① 実施期間

SGEは第1期(6月10日～6月26日)と第2期(6月30日～7月15日)の2回に分けて実施する。学校生活を送る上では、様々な要因が「感情」「思考」「行動」の変容に刺激となり、個々の人間的成長や集団の成熟に寄与する。変容を起こす可能性のあるSGE以外の様々な要因を、できるだけ排除しながらSGEの効果を測定したいと考え、それぞれの実施期間を12日程度と短く設定した。

全5学級をAグループ(a学級、b学級)とBグループ(c学級、d学級、e学級)に分けて、Aグループは第1期と第2期でSGEを実施しBグループは第2期でSGEを実施した。

② 実施の回数と内容

表1 SGEの実実施回数とエクササイズ

SGE実施回数					
学級	分類	回数	第1期（6月10日～6月26日）	回数	第2期（6月30日～7月15日）
			エクササイズ名		エクササイズ名
a	ショート	12	・心を合わせて「トラストアップ」 ・E・Tづくり ・私はわたしよ（10回）	13	・トラストワープ ・私はわたしよ（12回）
	ロング	2	・私はわたしよ ・ねえ、どっちがいい	2	・私たちのお店屋さん ・Xさんからの手紙
b	ショート	5	・私はわたしよ ・E・Tづくり	5	・ねえ、どっちがいい
	ロング	1		2	・ふわふわ言葉とチクチク言葉 ・気持ちを合わせて「みんなでポーン！」 ・Xさんからの手紙
c	ショート	0		0	
	ロング	0		3	・Xさんからの手紙 ・私たちのお店屋さん ・宝島を脱出せよ
d	ショート	0		0	
	ロング	0		3	・ふわふわ言葉とチクチク言葉 ・私たちのお店屋さん ・宝島を脱出せよ
e	ショート			8	・私はわたしよ ・わたしへのメッセージ
	ロング	0		3	・私たちのお店屋さん ・宝島を脱出せよ

③ 実施の仕方とエクササイズの選定

それぞれの学級のSGEの実実施回数とエクササイズについては表1のとおりである。エクササイズは、短時間でできるショートエクササイズを「朝の会」や「帰りの会」などで継続的に行い、ロングエクササイズを1単位時間に一つずつ行った。エクササイズの継続的な実施がしやすいことや児童が不安や緊張なく自己開示できること等から、学級担任がSGEのリーダーを務めることとした。また、より高い効果を得るには、児童の実態や学級集団の状態を考慮しながらエクササイズを選定することが必要となってくる。学級ごとのエクササイズについては、筆者がQ-Uの結果から適当と思われるいくつかのエクササイズを選定し、その中から学級担任が、担任としての思いやSGEリーダーとしての経験、エクササイズの難易度なども考慮しながら選んで実践した。

(3) SGEの効果の比較

① 実施期間の差による効果の比較(Aグループとe学級)

Bグループの内、Aグループと同様に学活の時間以外の「朝の会」や「帰りの会」等も利用して継続的にSGEを実施したe学級をAグループと比較した。

SGEが個々の人間的成長や集団の成熟に効果的であれば、Aグループは第1期からその効果が現れ、e学級は第2期でその効果が現れると考えた。

② 学級児童数の差による効果の比較(a学級とb学級)

学級内の児童数がSGEの効果に関係するのかどうかを調べるために、Aグループ内で、多人数学級のa学級と少人数学級のb学級を比較した。

③ SGEの実実施の回数の差による効果の比較(c学級、d学級とe学級)

SGEの実実施の回数が効果に関係するのかどうかを調べるために、Bグループ内で単発的にSGEを実施するc学級、d学級と継続的に実施するe学級を比較した。

3 SGEとQ-Uについて

(1) SGEとは

① SGEのねらい

SGEのねらいは行動変容である。行動変容とは、あたたかくて受容的な人間関係を基盤とした本音と本音の交流を通して、互いの良さを発見することを繰り返すことで、ふれあいがさらに深まり、認識の世界が広がったり認識の仕方が変わったりすることである。

② SGEの主な構成

ア エクササイズ

互いにふれあうためには、安心して自己開示し合えることが大切である。いろいろな事情を考慮して、グループサイズ、グループの構成条件、エクササイズの際の条件、時間制限、グループのルールなどに「枠」を与え、心的外傷を予防したり自己表現しやすくしたりすることで自己開示しやすいエクササイズを設定することができる。

イ シェアリング

シェアリングとは、エクササイズでの体験を振り返り、感じたことや気付いたことを表現したり伝え合ったりする活動のことである。この活動をすることで、体験したことの整理ができて児童は新しい自分を発見したり他者への理解を深めたりすることができる。SGEのねらいを達成していく上で、大切な存在である。

(2) Q-Uとは

① 結果から分かること

Q-Uは、「いごちのよいクラスにするためのアンケート(学級満足度尺度)」(以下学級満足度尺度)と「やる気のあるクラスを作るためのアンケート(学校生活意欲尺度)」(以下学校生活意欲尺度)の2種類のアンケートからなり、実施することで次の三つの情報を得ることができる。

- ・学級生活の満足感や学校生活における意欲といった個人の内面についての情報
- ・学級の雰囲気や成熟の状態といった学級集団の状態についての情報
- ・学級生活の満足感や学校生活における意欲の学級集団に対する一人ひとりの相対的位置

Q-Uを開発した河村茂雄は、「まとまりのある親和的な学級になるためには、学級にルールとリレーションの二つの要素が同時に確立していることが必要条件である」といつている。2種類のアンケートのうち、学級満足度尺度の結果からは、学級におけるルールとリレーションの確立の様子を知ることができる。

ルールとは、対人関係や集団活動・生活をする際のルールのこと、定着していれば、対人関係のトラブルは減少し、傷つけられないという安心感の中で、友人との交流も促進される。

リレーションとは、互いに構えがなく、ふれあいがあって本音の感情交流ができてきている状態のことで、定着していれば、仲間意識が生まれ、集団活動が協力的・活発的になる。

本研究においては、学級内の人間関係の変容を追跡調査する目的でQ-Uを実施するため、学級満足度尺度の結果を主に活用しながら研究を進めることとした。

② Q-Uの解釈

全21の質問のうち、学級満足度尺度に関する質問は12問である。質問1～6は「自分の存在や行動が、クラスの仲間や教師から認められていると感じているかどうか」の承認に関する内容で、この合計が「承認得点」である。質問7～12は「不適応感やいじめ、冷やかしなどを受けていると感じているかどうか」の侵害行為に関する内容で、この合計が「被侵害得点」である。

承認得点をY軸上に、被侵害得点をX軸上にとった交点を一人ひとりのプロットとし、図4のようにプロット図に表すことができる。この座標で二つの軸が直交しているポイントは、標準化されたときの全国平均値である。学級内にルールが確立していれば平均値よりも右側(低い得点)になり、学級

内にリレーションが確立していれば平均値よりも上側（高い得点）に分布するので、プロット図において右上に位置するほど学級生活により満足している状態であることを意味する。また、全国平均値と比較して、児童のタイプを「学級生活満足群」「非承認群」「侵害行為認知群」「学級生活不満足群」の四つの群に分類することができる。

・学級生活満足群（図5の①）

不適応感やトラブルも少なく、学校生活に意欲的に取り組んでいる児童である。学級内に自分の居場所をもち、自分の価値が認められていると感じている児童である。

・非承認群（図5の②）

不適応感やいじめ被害を受けている可能性は低い、学級内で認められることが少なく、自主的に活動することが少ない、意欲の低い児童が多い。

・侵害行為認知群（図5の③）

対人関係でトラブルを抱えているか、自主的に活動しているが自己中心的な面があり、他の児童とトラブルを起こしている可能性の高い児童である。被害者意識の強い児童も含まれる。

・学級生活不満足群（図5の④）

いじめや悪ふざけを受けている、不適応になっている可能性の高い児童で、学級の中で自分の居場所を見出せないでいる児童である。不登校になる可能性も極めて高い。

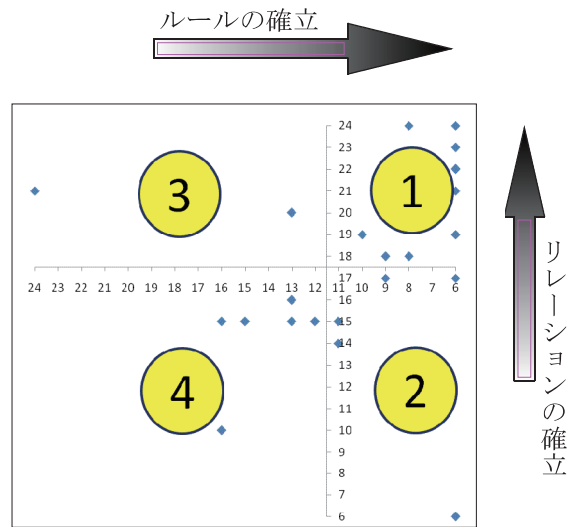


図5 学級満足度尺度のプロット図

IV 研究の結果と考察

1 Q-U結果の分析

(1) 実施期間の差による効果の比較(Aグループとe学級)

図6は、Aグループとe学級の承認得点の推移をグラフ化したものである。Aグループは第1期から得点が増加し、e学級はSGEを実施した第2期で得点が大きく増加したことが分かる。

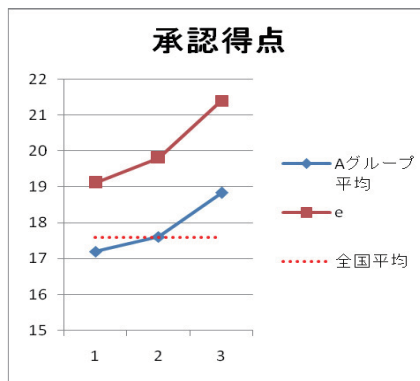


図6 承認得点の推移

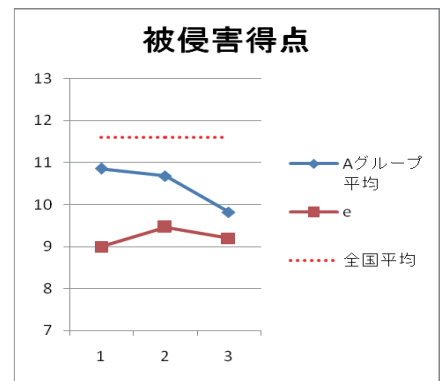


図7 被侵害得点の推移

図7は、Aグループとe学級の被侵害得点の推移をグラフ化したものである。被侵害得点は不適応感やいじめ被害がなければ得点は低くなる。Aグループは第1期から得点が増加し、e学級はSGEを実施していない第1期で得点が増加したがSGEを実施した第2期に得点が増加した。

Aグループとe学級共にSGE実施後から効果が現れたことから、SGEは望ましい人間関係づくりに効果的であるのではないかと考えることができる。

(2) 学級児童数の差による効果の比較(a学級とb学級)

① プロット図から

図8～図10はa学級、図11～図13はb学級のQ-Uの結果をプロット図で表したものである。

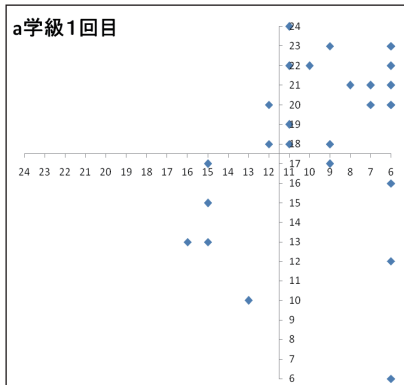


図8 a学級 1回目

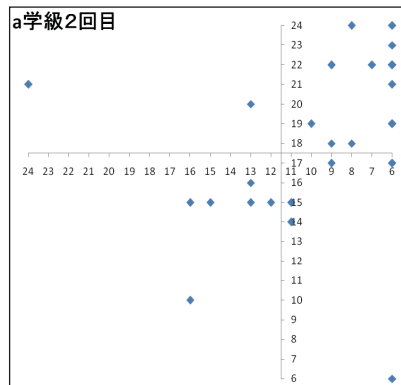


図9 a学級 2回目

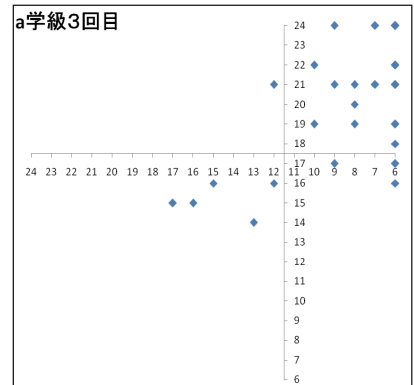


図10 a学級 3回目

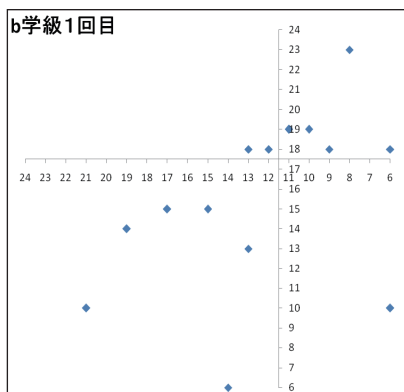


図11 b学級 1回目

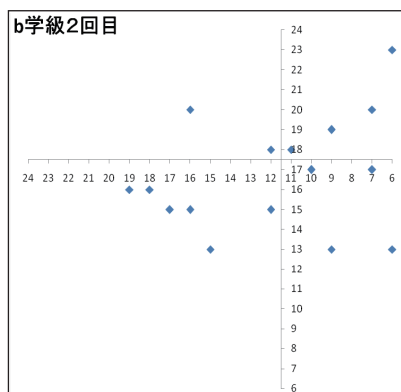


図12 b学級 2回目

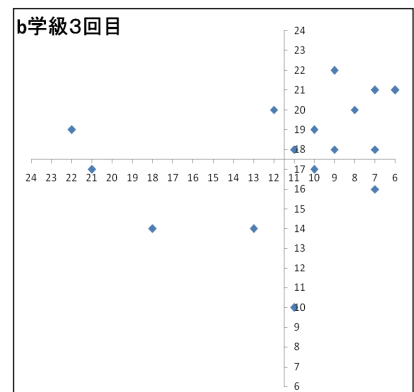


図13 b学級 3回目

a学級とb学級は、第1期からSGEを実施した。どちらの学級もSGEを始める前はプロットが四つの群に広く分布されていたが、SGEの実施を重ねるごとに学級生活満足群にプロットが凝集されていく様子がうかがえ、学級生活における満足感が高まったといえる。

② 各得点の推移から

図14は、a学級とb学級の承認得点の推移をグラフ化したものである。a学級は第2期で得点が大きく増加したことが分かる。b学級は、第1期と第2期で同じように得点が増加したことが分かる。

図15は、a学級とb学級の被侵害得点の推移をグラフ化したものである。a学級は第1期でわずかながら得点が増加したが、最終的には得点が減少しSGE開始前よりも被侵害得点が低くなったことが分かる。b学級は第1期と第2期で同じように得点が増加したことがわかる。

どちらの学級も学活の時間以外の「朝の会」や「帰りの会」等も利用して継続的にSGEを実施したが、多人数のa学級は効果が現れるのに時間がかかった。それに比べ少人数のb学級は第1期から効果が現れた。

(3) SGEの実施の回数による効果の比較(c学級、d学級とe学級)

① プロット図から

図16～図18はc学級、図19

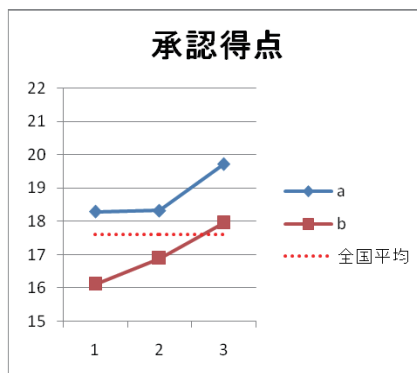


図14 承認得点の推移

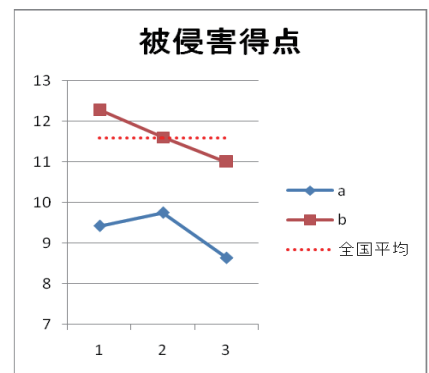


図15 被侵害得点の推移

～図21はd学級、図22～図24はe学級のQ-Uの結果をプロット図で表したものである。

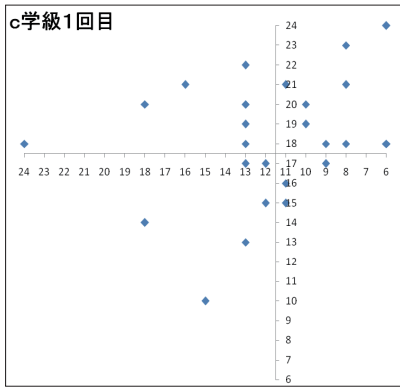


図16 c学級 1回目

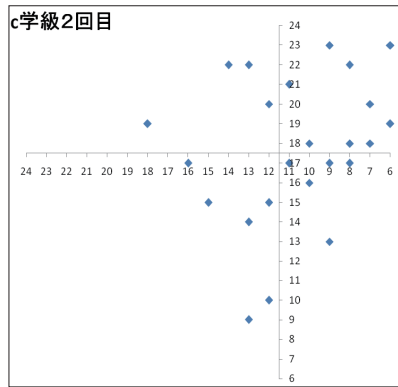


図17 c学級 2回目

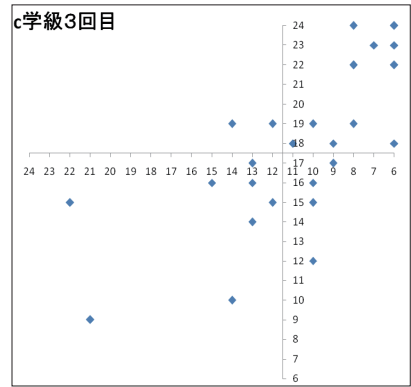


図18 c学級 3回目

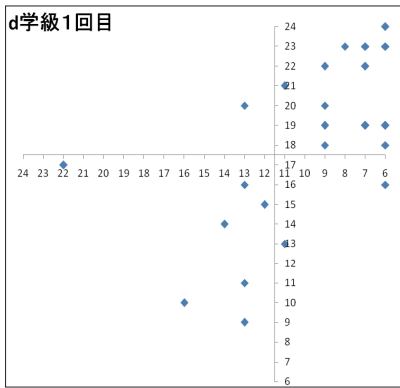


図19 d学級 1回目

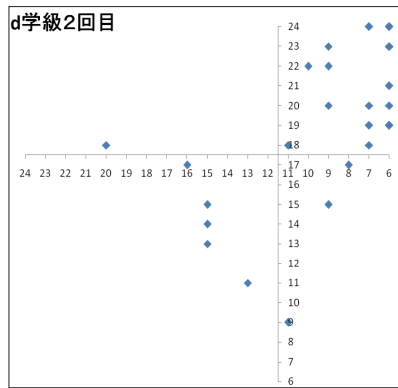


図20 d学級 2回目

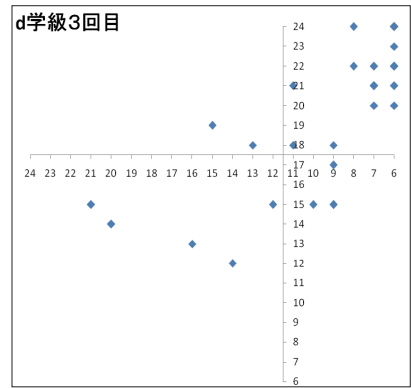


図21 d学級 3回目

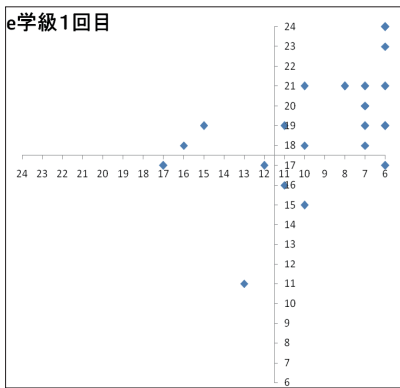


図22 e学級 1回目

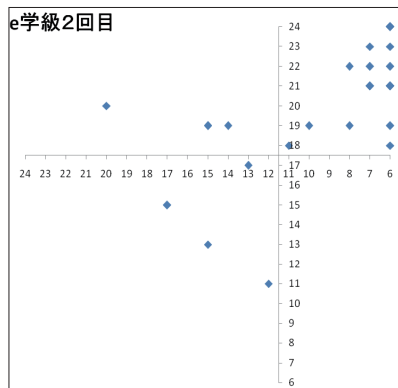


図23 e学級 2回目

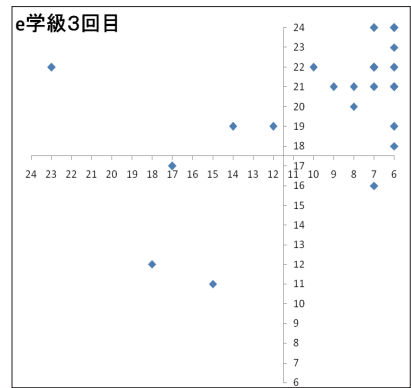


図24 e学級 3回目

c学級とd学級とe学級は、第2期からSGEを実施した。どの学級のプロット図からも、学級生活満足群にプロットが凝集されていく様子をはっきりとつかうことはできない。

② 各得点の推移から

図25は、c学級とd学級とe学級の承認得点の推移をグラフ化したものである。c学級は第2期で得点が減少し、d学級は第1期よりも第2期の方が得点の増加が少なかったことが分かる。e学級は、第2期に得点が大きく増加したことが分かる。

図26は、c学級とd学級とe学級の被侵害得点の推移をグラフ化したものである。c学級とd学級は第2期で得点が増加し、e学級は減少していることが分かる。

e学級はSGE開始後から承認得点が高くなり、被侵害得点が低くなっていることから、学級生活での満足感が高まったといえる。c学級とd学級が学活の時間等に単発的にSGEを実施したのに対し、e学級

はa学級やb学級と同様に、学活の時間以外の「朝の会」や「帰りの会」等も利用して継続的にSGEを実施した学級である。短い期間であっても継続して行うことでSGEの効果を高めることができると考えられる。



図27 SGEの様子

(4) 度数分布の割合の変化の比較

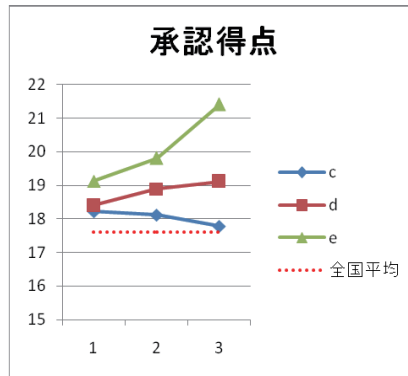


図25 承認得点の推移

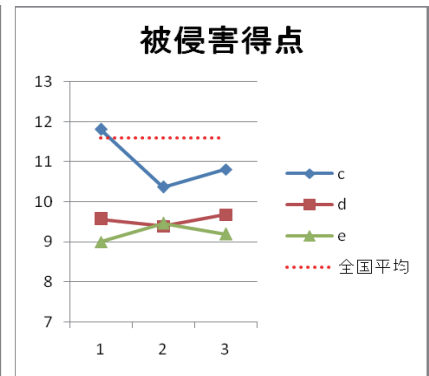


図26 被侵害得点の推移

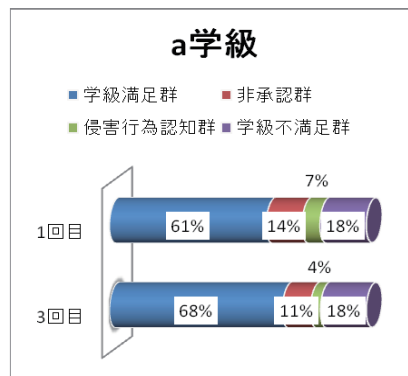


図28 a学級の各群別割合

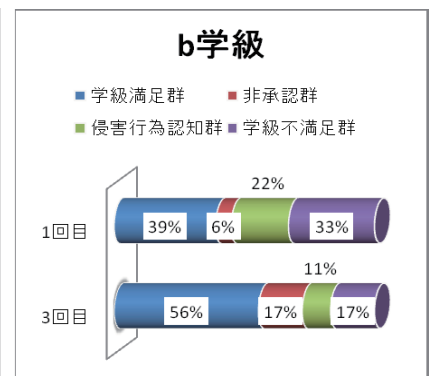


図29 b学級の各群別割合

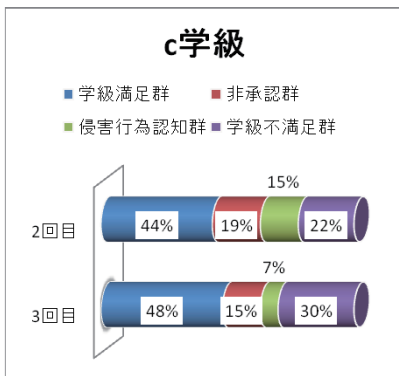


図30 c学級の各群別割合

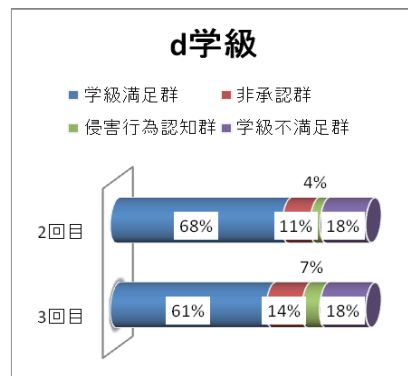


図31 d学級の各群別割合

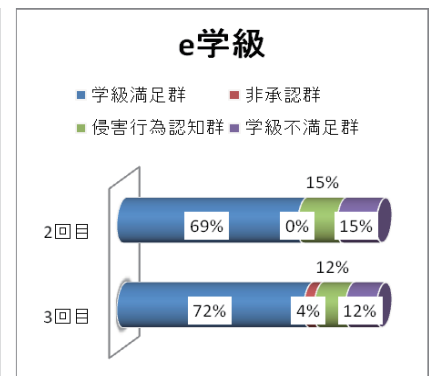


図32 e学級の各群別割合

図28～図32は、SGE実施前後の度数分布の割合の変化を比べたものである。このグラフからも、SGEを継続的に実施したa学級、b学級、e学級は、実施前に比べて実施後に学級満足群の割合が増加し、同時に学級不満足群の割合が維持・減少したことが分かる。このことから継続して行うことがSGEの効果を高めると考えられる。

2 Q-U結果の信頼性の検証

SGE実践前後の度数分布の割合の変化について、 χ^2 検定によりその有意性を検定した。その結果、b学級（小規模校）において1%および5%の有意水準で統計的に有意な差がみられた（表2、3）。それ以外の学級では有意な差はみられなかった。

b学級は、幼稚園からの単学級で転出入もほとんど無く友人関係が固定されている。小集団であるため、SGEによる自他の違いや良さへの気づきが、日常生活の場でのさらなるふれあいや認め合いにつながりやすく、その繰り返しがSGEの効果を高めた要因の一つと考えられる。

表2 χ^2 検定の結果（上段：実測値、下段：期待値）

b学級	学級生活満足群	非承認群	侵害行為認知群	学級生活不満足群
Q-U1回目	39	6	22	33
	47.264	11.443	16.418	24.876
Q-U3回目	56	17	11	17
	47.736	11.557	16.582	25.124

表3 χ^2 検定による残差分析の結果（▲有意に多い、▽有意に少ない）

b学級	学級生活満足群	非承認群	侵害行為認知群	学級生活不満足群
Q-U1回目	-2.335 * ▽	-2.412 * ▽	2.126 * ▲	2.651 ** ▲
Q-U3回目	2.335 * ▲	2.412 * ▲	-2.126 * ▽	2.651 ** ▽

+p<.10 *p<.05 **p<.01

3 アンケートの結果

(1) 子どもの振り返り

SGE終了後に児童に振り返りのアンケートを実施した。

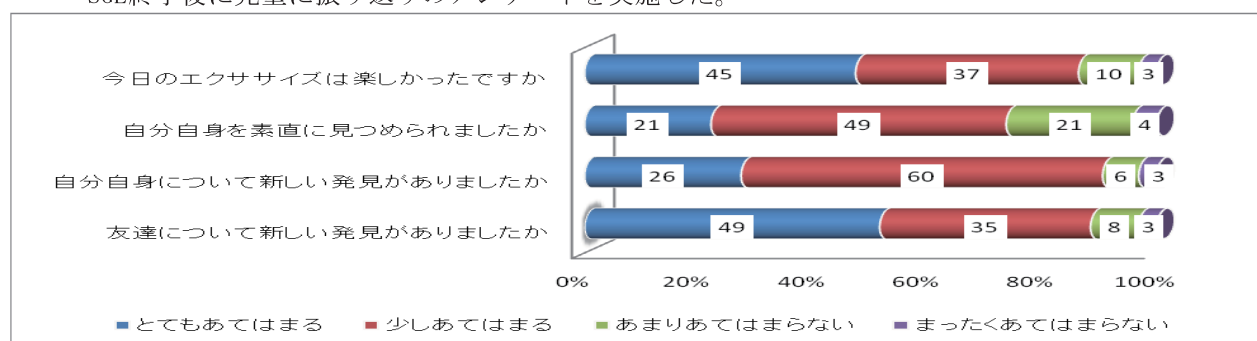


図33 エクササイズ実施後のアンケート集計結果

すべての質問項目において、「とてもあてはまる」「少しあてはまる」を合わせた肯定的な回答が7割を超えている。「友達について新しい発見がありましたか」の項目では約5割の児童が「とてもあてはまる」と答えている。

自由記述では、下記のような感想があった。

- ・ 友達の意外なところを知るきっかけになったので良かったと思います。しかも、とっても楽しかったので良かったです。
- ・ ぼくは、みんなからどう思われているかがとても知りたかったので、それを知れて良かったです。
- ・ 今まであんまり自分について発見することはなかったけど、少し発見できたのでこれからもやりたいです。
- ・ 自分の感じていないところで、いろんなことをやっていたんだなと思いました。
- ・ 元気がいい、がまん強い、そんないいところが私にあるなんてと思いました。PS:誰が書いたんだろう。
- ・ みんなの放課後のことや意外な一面が見れて良かったです。
- ・ 友達はいろんな良いところと駄目なところをもっていて、人間らしいなと思いました。
- ・ もっとやりたい、もっと友達について新しい発見をしたいと思いました。

児童の感想からは、シェアリングを通して、自分が知らなかった友達の良さをも知ることができたりうれしさと、更に知りたいという気持ちが伝わってくる。また、他者から認められる喜びは自分への自信や自尊感情の高まりにつながるだろう。

実施期間全体を振り返るアンケートでは下記のような感想があった。

- ・ 友達の隠れたすごいところがあってうれしかったです。これからも男女関係なく遊びたいと思います。それにこのような活動を通して、班の人やあまりしゃべらない友達とも楽しく協力して、いろい

ろなことに取り組めたので良かったです。またしたいです。

- ・班のみんなと協力して答えを出したときは達成感がありました。
- ・いろんな楽しいことをして学級の仲もすごく深まったと思いました。
- ・やっぱりエクササイズは友達と私がふれあっているという感じがしますね。これまでやってきた中で楽しくないというのは一つもなかったです。それと友達と4か月触れ合ってみて、あとの何か月かが楽しみになってきました。
- ・楽しみながら心の勉強をすることは初めてだったので、いろんなことを発見できたのではないかと思います。

楽しく学習しながら、自他の良さを発見したり協力しながら活動したりできたという感想が多かった。また、「これからも男女関係なく遊びたい」「あとの何か月かが楽しみになってきた」などの言葉からは、これからの学校生活に対する期待の気持ちがうかがえる。

(2) 担任の振り返り

SGE終了後に担任に振り返りのアンケートを実施し、下記のような回答を得た。

【質問1】 3回の構成的グループエンカウターの指導を通して、指導者として気付いたこと、感じたことを教えてください。

- ・エンカウター（毎朝のショートエクササイズ）をやるたびに、子どもたちが「楽しかった」「またやりたい」と言ってくれたことがとてもうれしかった。
- ・朝の会や帰りの会で継続的に取り組むのは、短時間ではあるが友達のことを知る上で効果的だった。
- ・どのエンカウターも、子どもたちは楽しんでいて、もっと準備が簡単で楽しめるものをやってみれば良かった。
- ・子どもたちの様子を見てみると、こうした活動はとても大切だと思った。

【質問2】 学級の子どもの変容について、気付いたことを教えてください。

- ・あまり話したことのない子同士で話をするので、仲間意識が高まっていった気がした。
- ・グループで話し合うエンカウターを取り入れたことで、これまであまり話す機会がなかった子と話す機会が増えたようである。
- ・男子と女子が気軽にふれあう場面が増えたように思った。

【質問3】 気がかりだった子どもたちの変容について、気付いたことを教えてください。

- ・MさんやNさん等気になる児童がクラスの中で以前より居心地が良さそうに見える。(Q-Uの結果も向上)
- ・無気力孤立気味だったK男が少しずつ他のクラスメイトと遊ぶ姿が見られるようになった。

【質問4】 構成的グループエンカウターについての印象について教えてください。

- ・「やって良かった」というのが第1の感想である。研究協力員として声をかけていただきよかった。今後もやっていないエンカウターをやってみたい。
- ・子どもが楽しんでコミュニケーションできるものが多いので、機会をみてまたやってみたいと思った。
- ・時間の確保が難しい。

SGEが望ましい人間関係に効果的だと認める意見が多かったが、時間の確保等の課題も見えてきた。

V 研究のまとめと今後の課題

○少人数学級において、望ましい人間関係を築きよりよい学級集団を形成する方法として、SGEは有効であると考えられる。

今回の実践では、少人数学級以外は χ^2 検定による有意差はみられなかった。しかし、少人数学級以外の児童も、SGEが自他理解を促進し人間関係づくりに効果的だと感じていて、これからのSGEや学校生活に対する期待の気持ちをもつことができた。担任もSGEによる個々の児童の意識と学級集団の変容を認めている。また、朝の会や帰りの会等でもSGEを取り入れるなどして継続的に実施した学級のプロット図からは、4群に散らばっていたプロットが次第に学級生活満足群に凝集し、学級が集団として成熟していく様子がうかがえる。もちろん、SGEのみが個や集団の変容に刺激となったわけではないが、SGEは望ましい人間関係をつくりよりよい学級集団を形成する一つの方法として有効である可能性があり、期待をもてるものである。

○計画的な実施の工夫が必要である。

SGEは、継続的に行うことでより高い効果を得られると考えられる。どのように時間を確保するかが課題である。本研究では、学級活動や朝の会、帰りの会等の時間を利用しての実践となったが、道徳や教科等の中にも効果的に取り入れるなど、継続的に実施できるように時間を生み出す工夫をする必要がある。効果的なインストラクション、エクササイズのシンプル化、シェアリングの形態の工夫をすれば短時間でもSGEを実施できるだろう。

また、個々の成長や人間関係の深まり、学級集団の変容に応じたエクササイズの選定も必要となる。どの時期にどのタイミングでどのようなエクササイズを実施するのが効果的なのかを考え、年間カリキュラムを確立するとともに、SGEによる気づきをいかに日常生活へつなげることができるかも課題となる。

○個別のアプローチと日常的なカウンセリングが必要である。

SGEは集団に対するアプローチであるが、それだけでは十分に支援できない児童に対する個別のアプローチが必要である。学級集団が成熟していく一方で、承認得点が減少したり被侵害得点が増加したりした児童が数名いた。これらの児童は孤立感を高めたと考えられる。このように、集団の変容に適応していくことが苦手な児童には、日常的なカウンセリングや個別の配慮が必要である。

よりよい人間関係を促進させるために、肯定的な他者理解力育成の支援の在り方についても、今後探っていきたい。

<謝辞>

研究協力員の先生方には、お忙しい中多大なる御協力をいただきました。深く感謝申し上げます。

《引用文献》

- 福井県教育庁義務教育課(2008)『平成20年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』結果について

《参考文献》

- 伊東貴之(2004)「構成的グループ・エンカウンターを用いた人間関係づくりの工夫—体育科の学習を通して—」やまぐち総合教育支援センター
- 河村茂雄(2007)『学級づくりのためのQ-U入門』図書文化社
- 教育相談研究プロジェクト(2002)「学校で生かせる集団づくりのための有用な活動の研究」『研究紀要』第107号、福井県教育研究所
- 國分康孝他(2004)『構成的グループエンカウンター事典』図書文化社
- 國分康孝他(2007)『Q-Uによる学級経営スーパーバイズ・ガイド』図書文化社
- 福井県総務部政策統計課(2008)『平成20年度学校基本調査結果(速報)』
- 文部科学省(2008)『平成20年度学校基本調査速報』
- 文部科学省(2008)『小学校学習指導要領解説—特別活動編—』
- 吉村ひろみ(2002)「学級集団づくりに生かす構成的グループ・エンカウンター」『研究紀要』第107号、福井県教育研究所